

水俣学通信

第 3 号
2006.3.1

News from the Open Research Center for Minamata Studies



赤崎(津奈木町) - 1985年(写真提供: 原田正純)

目 次

論説: 胎児性水俣病患者を 取り巻く社会関係	2	第2回 公開講座「いのちと環境を考える」	
環境被害に関する 国際フォーラム	3	第3回 公開セミナー 「欧州における社会的経済の発展から何を学ぶか」	
第4期 水俣学講義	3	第4回 公開セミナー 「環境と健康に関する日韓ワークショップ」	
研究員報告	4	第5回 公開セミナー 「水俣学入門講座」	
2005年10月からの活動・調査報告 ...	5	第1回 水俣病事件研究交流集会	6
福祉環境学科卒業演習 宮北ゼミ水俣再訪	5	水俣学現地研究センター便り	7
第1回 公開講座「地域と福祉を考える」		今後の活動予定	8

〔論説〕

胎児性水俣病患者を取り巻く社会関係

水俣学研究センター リサーチアシスタント 田尻 雅美

水俣病事件は長い歴史があり、水俣病に関する研究論文、著作、写真集は多く出版されている。しかし、胎児性水俣病患者に関しては意外と少なく、現在の実態も十分に明らかではない。そこで、胎児性水俣病患者のイメージが社会と時代との関係性においてどのように変化したのかを考察してみる。

1. 発見から認定まで (1956年~1962年) : 1950年代は戦後の貧困対策としての福祉の時代で、障害者、障害は不幸という社会一般的通念があった。1959年12月に水俣病問題は水俣病患者家庭互助会とチツソの間に見舞金契約が締結されたが、この時も胎児性患者は取り残されて、救済の枠外であった。生まれつきの病気、障害があることで不幸な子どもとして存在した。胎児性患者達は原因不明のため個人の問題として、親の責任として医療機関の受診と検査、または研究対象者としての存在であった。また、発生当初、水俣病は漁村地区に多く発生する奇病であり、その地域に多発した胎児性患者は、感染の恐れのため、村八分のように差別を受けた時代であった。

2. 認定から裁判提訴まで (1962年~1969年) : 1960年代は障害者が施策の対象として位置づけ始められた時代といえる。高度経済成長にともなう労働力不足解消を補うこと、経済成長維持のためには「人口資質問題」が中心となり、「国民の遺伝素質の向上」が目的となった。そのような中、新潟で水俣病が発見されると胎児性患者が生まれることを未然に防ぐために出産制限の勧告が行政指導の下行われ、現在も、新潟に胎児性患者は1人しかいないとされている。

内田守教授(熊本短期大学)が1964年2回行った現地調査の報告の中で小児患者を¹⁾「生ける屍」と表現している。この当時、障害者は、施設、収容、隔離されていた。さらに重度の障害者は施設もなく自宅に閉じ込められていたため、一般の人達にとって障害者は特別な存在であった。そのため胎児性水俣病も「生ける屍」というような悲惨な存在とされていた。1962年11月、やっと胎児性水俣病と認定されると今度は、「水俣奇病」とされ、障害者とは明らかに区別されることになった。水俣病患者にしてみれば原因が明確にされたが、「水俣奇病」というイメージが彼・彼女達に重なることになった。

胎児性患者は多くが、就学猶予・免除によって義務教育を受けていない。「他の兄弟は、小学校に行くのになぜ自分はいかれないのだろうと思っていた」とA君が言うように、A君が義務教育を受けられるようになったのは、湯之見分校ができた1969年12歳の時であった。しかし、一般の学校と分離され、その教育も一般の教育とは違い、訓練、指導によって障害を克服し社会に適応する努力をしなければならなかった。また、Bさんが「小学校に行くために市立病院に入院せろとお母さんが言いました」と

言うように、特殊学級が自宅から離れたところにしかなかったために、義務教育を受けるために自宅から離れ、病院、明水園と施設へ入所せざるを得なかった。

1965年ころになると水俣病の写真集などが出版されるようになって社会問題としての水俣病が注目されるようになった。それは公害が悲惨な被害者を生み出す、悲惨な患者たちの姿が重篤な障害児として社会に強烈な印象を与えた。さらに1968年9月水俣病が政府により正式に公害認定されたことにより、胎児性患者には、さらに「公害被害者」というイメージが重なることとなった。

3. 裁判提訴から判決まで (1969年~1973年) : 1970年代は救済・保護の対象としての施策の時代といえる。障害・先天異常を未然に防ぐことに力が注がれる時代となった。1969年6月水俣病訴訟が提訴され、裁判で親や医師などの証言者は胎児性患者の被害の深刻さを理解してもらうために、何もできないことをあえて強調した。このことがいつまでも彼・彼女らにつきまとい、本来の姿以上に何もできない被害者というイメージが出来上がってしまった。

4. 判決から政治的解決まで (1973年~1995年) : 1980年代はノーマライゼーション、1990年代は障害者の生活支援が政策の課題となってくる時代となった。しかし、障害は個人の問題であることに変わりにはなかった。

この時期、胎児性患者の一部は、差別的弁論大会に対する抗議、仕事を要望するチツソへのピラまき、石川さゆりショー開催、映画作成上映、一般の障害者との交流、音楽会開催、写真展開催など自立を模索し、さまざまな自主的活動を行った。しかし、水俣病の未認定問題が運動の中心の課題となっていく影で、注目を浴びるのは一時的でしかなかった。

5. 政治的解決からチツソ水俣病関西訴訟最高裁判決まで (1995年~2004年) : 財政削減下での「措置から契約へ」の時代で、障害の発生を社会的なものに見出した。胎児性患者は政治的解決後、問題になることも少なく、わずかに「ほっとはうす」、「ほたるの家」のような障害者と共に働く場など活動の模索はあるが、大人たちの問題の片隅に追いやられている。

6. 胎児性水俣病患者の課題: 「公害被害の象徴」が彼・彼女達にまわり、本来の姿以上に何もできない被害者というイメージが出来上がっている。障害を持って生きること、公害被害者として生きることが重層的に引き受けることを余儀なくされているから彼・彼女達にとって、現在の生活と将来の不安にどのような「こたえ」が用意できるかが現在の課題である。そのためには「被害とは何か」を明らかにしつつ「胎児性水俣病患者のイメージ」「水俣病観」の転換が50年経った今求められている。

1) 内田守「水俣病のリハビリテーションと社会的治療の諸問題」『熊本短大論集第34号』熊本短期大学 1967年6月p28

2006年9月8～12日開催

環境被害に関する国際フォーラム

「水俣病の教訓は活かされたか」

水俣では、過去すでに何回も国際会議が開かれてきた。しかし、それは主として研究者を中心にした学術会議であった。

本年、熊本学園大学水俣学研究センターでは水俣病半世紀を被害者の視点から水俣病事件を人類史的に検証する企画を進めている。すなわち、単なる学術会議でも、経験交流でも、イベントでもない試みである。

本会議の特徴は被害者の視点に立った研究者、弁護士、NGO活動家、被害者が共同で研究発表および交流・ネットワークづくりを行う点にある。初めての試みであるために全国のボランティアの協力が必要である。日本環境会議およびアジア・太平洋環境会議などが後援する。

2006年9月8日、9日

研究発表とフォーラム（会場：熊本学園大学）

9月11日、12日

現地見学、被害者交流会、ワークショップ（会場：水俣市内）

熊本学園大学でのフォーラムがアカデミックな色彩が濃く、水俣のワークショップはいくつかのグループに分かれて現地見学、水俣病患者や相互の交流、今後のネットワークづくりに重点がおかれる。その会議の様子は、報告書としてまとめられる。

参加予定：

カナダ先住民居留地の水銀汚染事件。アマゾン川流域の水銀汚染事件。モンゴル金鉱山の水銀汚染事件。中国水銀汚染事件と河川汚染事件。台湾土壌汚染問題。フィリピン基地跡汚染事件。バングラディッシュ大規模地下水砒素汚染事件。インド・ボパール農薬漏洩事件。ベトナム戦争枯葉剤汚染後遺症事件。韓国・温山病など13カ国15事件の招聘を計画している。

（問い合わせ：熊本学園大学水俣学研究センターおよび水俣学現地研究センター）

第4期 水俣学講義 2005年度

■ 開講日：9月28日～1月18日 毎週水曜日 全13回 ■ 時間：13：00～14：30

社会福祉学部3年の受講生90人、その他大学院生、外部から受講。

第1回 「水俣学第4期を迎えて」

花田 昌宣（熊本学園大学）

第2回 「水俣病50年」

原田 正純（熊本学園大学）

第3回 「事件史から見た最高裁判決の限界」

富樫 貞夫（熊本学園大学）

第4回 「水俣病を原点とした大学授業」

木野 茂（立命館大学）

第5回 「生命の記憶よ蘇れ」

緒方 正人

第6回 「『環境モデル都市』水俣：取り組みの成果と課題」

宮北 隆志（熊本学園大学）

第7回 「水俣・厳存する風景」

芥川 仁（写真家）

第8回 「地域調査の方法と実践」

守弘 仁志（熊本学園大学）

第9回 「水俣に住んで30年」

高倉 史朗（ガイヤみなまた）

第10回 「語っておきたいこと」

松本 勉（水俣市民会議）

第11回 「新潟水俣病と取り組んで」

齊藤 恒（木戸病院名誉院長）

第12回 「私と水俣病報道」

村上 雅通（RKKディレクター）

第13回 「水俣病と取り組んで」（シンポジウム）

熊本学園大学大学院生

荒木 千史・永野 いつ香

熊本学園大学水俣学研究センター

リサーチアシスタント 田尻 雅美

締めくくり 原田 正純



講義風景 2006年10月26日

水俣病事件と私

福祉環境学科 赤星 香世子



熊本出身の私には「水俣病」との関わりは、高校時代の友人の家が水俣にあり、招待された際に「新鮮な魚がご馳走になれる！」と、喜んだのに、「水俣の魚は、食べん方が良かけん・・・」とお肉料理だったのに、がっかりし、「どうしたんだろう・・・」と不思議に思ったことが記憶にあります。その後、水俣を訪れたのは、水俣病県民会議医師団が行っていた検診活動に、平田宗男医師のかばん持ちのようにして付いて行った頃です。当時、精神科の熊本保養院の医療ソーシャルワーカーの私は、仕事休みの日曜は他のスタッフと交代で、患者掘り起こし検診に水俣を訪れていました。ある日、到着した私たちの案内役の男性が、赤い目をされていたので「どうされたのですか？」と聞くと、「いや～、今朝が夜勤明けで・・・寝とらんけん・・・」と恥ずかしそうにされました。私は、こんな献身的な方が支援されているのだ・・・と胸が熱くなったことを憶えています。この男性が、当時病院勤務だった川本輝夫氏です。訪問先の家々は、患者を抱えての生活の

困窮から、まさに極貧の状態でした。土壁は剥げ落ち、暗い部屋は、目を慣らすのに時間が必要でした。訪ねていっても「もう、こんではいよ・・・」と、悲しげに断られる家もありました。

当時、熊本短期大学（現在の学園大学）で教鞭をとられていた岡本民夫先生が、日本社会福祉学会（S43・札幌）で水俣の現状を「水俣病と人権 ―社会福祉との関連―」として報告され、「水俣病問題は・・・住民の心身両面の損傷と生活破壊等、人間生活のあらゆる側面に被害が波及した公害事件である」と指摘されています。

今、私はこの大学の社会福祉学部の教員として、再び、水俣病事件と関わる事に思いを新たにしています。水俣病事件は被害者の方々をはじめ、支援側であったソーシャルワーカー達にとっても、多くの辛苦を味わった事件といえます。50年をそれぞれの立場から振り返り、共に考察し、新たな展開に貢献できる事を切望しています。

私の水俣学のはじまり

社会福祉学科 和田 要



水俣病が多くの人びとと命を奪って今なお苦しむ命がある。痺れや「しょうがい」を抱えながらも日々の暮らしを継続して、水俣のまちを愛しながら生活をされている。社会福祉は、どれほど向き合ってきたかを考えている。「患者」を「患者さん」とよび「患者様」とすら呼ぶのはどこか違和感がある。

かつて、水俣病は発生した時に、まさしく心を串刺しにされて、被差別の状況で声をあげてきた多くの人びとを「生命と生活のある者」として位置づけていきたいのが私の水俣学のテーマにしたい。水俣病の闘いの歴史は、裁判と行政と企業で対峙してきた歴史でもある。しかしながら、そのエネルギーや視点や闘いの方法の源泉は、人間に対する多くの願いが込められている。

社会福祉が人に優しい言葉ではあっても、本当に当事者から学ぶことで教訓や原則を導き出しえたのか、社会システムを検証し、新しい地域づくりにつながる

営みが創造できるか、「生命と生活者」である当事者から多くを教えてもらいたいと願っている。

介護問題はすべての者が経験する人生の二度のステージがある。初めは乳児の時代でいわばしつけや身の回りの自立であり、二度目は老齢や病気や「しょうがい」などによって、人間としての基本的権利である移動・入浴・排泄などを支えられるステージがある。介護は関係と状況と空間とコミュニケーションが重要な要素であり、いかに介護から介護福祉への止揚をめざしていくことができるかを考え、実践に役立つ提言をめざしていきたい。

ADL（日常生活動作）を支えながら、いかにQOL（生活の質）を高め、ROL（Respect of Life）尊厳ある自立した生活の指標を明らかにしたい。

何より水俣の「命活者」の一人ひとり向き合うことをしながら、水俣学現地研究センターから世界に向けて発信できるよう進めていきたい。

福祉環境学科卒業演習 宮北ゼミ 水俣再訪

福祉環境学科 4年 小川 裕子

私達宮北ゼミでは、昨年10月29～30日に卒業演習の一環として、一泊二日の日程で水俣でのゼミ合宿を実施しました。この合宿は、春学期末にゼミで宮北先生が行ったアンケートに、「もう一度水俣研修がしたい。」と言う要望が複数寄せられた事が発端でした。

福祉環境学科では一年生の時に、フィールドワークとして水俣研修が行われます。三年が経った現在の時の事を振り返り、水俣が公害の歴史にどう向き合い、水俣再生にどう取り組んできたのかを再び直に学びたいと、秋学期から合宿実現に向けて動き出しました。

合宿に先立ち事前学習として、ゼミ生を四つのグループに分け、「関西訴訟判決とは」、「判決以降の動き（行政、被害者）」、「環境モデル都市の取り組み」、「産業廃棄物処分場計画」についてグループごとに調べ発表しました。

十月末に実現したゼミ合宿では、以下のような体験をしました。

- 昨年八月に水俣にオープンした水俣学現地研究センター見学
- 肥薩おれんじ鉄道の利用者を対象とした水俣駅レンタサイクル体験
- 箱滝（水俣七滝の一つ）清掃活動
- 永野温泉オーナーの永野さんから水俣病・訴訟の歴史、温泉街再興に向けてのお話

● 村丸ごと生活博物館の一つ、^{かぐめいし}頭石の皆さんとの交流
この水俣での合宿で地域の人と交わり、レンタサイクルの取り組みや清掃活動など共に体験する事で、環境問題への姿勢、自然や農産物及び歴史や温泉を活かした魅力ある水俣づくり、住民一人一人がより良い水俣づくりに一丸となる市民性に触れる事ができました。それぞれに共通する背景には「水俣病」があると思います。

水俣病公式確認から五十年。水俣という町はこれからも、水俣病を教訓として成長しつづけていくのだと思います。



「湯の鶴のこれからを考える会」の皆さんと一緒にいった箱滝周辺の清掃活動の成果

第3回 公開セミナー

「欧州における社会的経済の発展から何を学ぶか」

講師：ティエリー・ジャンテ氏
（「社会的経済」ヨーロッパ団体連合理事）

日時：2005年11月29日（火） 14：00～17：00

場所：熊本学園大学図書館地下AVホール

参加人数：41人

講師：Kim Yoon-Shin 氏
（Hanyang University）

日時：2005年12月17日（土） 9：30～12：30

場所：熊本学園大学図書館地下AVホール

参加人数：20人

第4回 公開セミナー

「環境と健康に関する日韓ワークショップ」

講演1 「アジアの砒素中毒事件について」

講師：堀田宣之氏（桜ヶ丘病院理事長）

講演2 「韓国における環境衛生政策の展望」

第5回 公開セミナー

「水俣学入門講座」

講師：原田 正純
（熊本学園大学社会福祉学部教授）

日時：2006年1月7日（火） 10：00～12：00

場所：熊本学園大学 本館4階 第1会議室

参加人数：60人

第1回 公開講座「地域と福祉を考える」

- 日 時：2005年11月11日～12月9日
毎週金曜日18：30～20：30
- 場 所：水俣市公民館 研修室
- 受講者数：80名 他 大学生・大学院生が参加
- 協力・後援：水俣市、水俣市社会福祉協議会

- ① 「社会福祉をどう考えるか」
花田 昌宣（熊本学園大学 社会福祉学部長）

- ② 「精神保健と社会福祉」
赤星 香世子（熊本学園大学 社会福祉学部教授）
- ③ 「障害者の地域における暮らし」
堀 正嗣（熊本学園大学 社会福祉学部教授）
- ④ 「地域福祉が拓く『誰もが安心して暮らせるまちづくり』」
高林 秀明（熊本学園大学 社会福祉学部助教授）
- ⑤ 「老いを生きる意味」
天田 城介（熊本学園大学 社会福祉学部助教授）

第2回 公開講座「いのちと環境を考える」

- 日 時：2006年1月27日～3月3日（2/3を除く）
毎週金曜日 18：30～20：30
- 場 所：水俣市公民館 研修室
- 受講者数：40名
- 協力・後援：水俣市、水俣エコタウン協議会

- ① 「廃棄物とどう向き合うか？」
宮北 隆志（熊本学園大学 社会福祉学部教授）
- ② 「裂けた時限爆弾：アスベスト」

- 古谷 杉郎
（全国労働安全衛生センター連絡会石綿対策
全国連絡会議 事務局長）
- ③ 「海の生きものたちの恵み」
佐藤 正典
（鹿児島大学 理学部地球環境学科助教授）
- ④ 「なぜ、農学ではなく、百姓学か」
宇根 豊（農と自然の研究所）
- ⑤ 「いのちと環境」
原田 正純（熊本学園大学 社会福祉学部教授）

第 1 回 水俣病事件研究交流会

2006年1月7～8日（土・日）

- 場 所：熊本学園大学 本館4階 第1会議室
- 参加人数：93名

- 永野いつ香（熊本学園大学・大学院生）
「水俣病差別の現在とその意識構造」
- 荒木千史（熊本学園大学・大学院生）
「出水の申請者運動／人権救済について」
- 宮澤信雄（フリー・元 NHK 記者）
「最高裁判決と総合対策医療事業」
- 谷 洋一（水俣病被害者互助会事務局）
「関西訴訟最高裁判決以後の新たな局面：被害者の運動を中心にして」
- 不知火海研究プロジェクト
「水俣病認定申請者 生活実態調査中間報告」
- 鶴田和仁（古賀総合病院）
「水俣病運動障害に関する考察」
- 津田敏秀（岡山大学）
「溝口訴訟津田意見書・証言から」
- 浦崎貞子（新潟青陵大学）
「新潟水俣病における妊娠規制と授乳規制の検証と考察」

- 矢作 正（浦和短期大学）
「1970年代前半、水俣工場の合理化問題」
- 細谷 孝（中央大学）
「証言の構造を考える」
- 松本 勉（水俣ほたるの家）
「水俣湾・八幡プールに眠る水銀の処理」
- 木野 茂（立命館大学）
「アスベスト問題と水俣病事件」
- 田嶋いずみ（「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク）
「『水俣』を子どもたちに伝えるネットワークの活動家から」
- 木野 茂・山中由紀
「関西の患者の新たな動き～なにわの水俣まんだら・女編」
- 宮北隆志（熊本学園大学）
「『環境モデル都市』をめざす水俣と産業廃棄物処分場」
- 富樫貞夫（熊本学園大学）
「中国淮河環境汚染について」



水俣学現地研究センター便り

水俣学現地研究センター長 宮北 隆志

新たな学としての「水俣学」を、多様な関係者の協働作業で創り上げていく拠点としての「現地研究センター」が活動を始めて6ヶ月が経過しました。「公開講座」、「健康・福祉相談」、並びに、少しずつ動き始めた「個別プロジェクト」への関わりによって、芦北・水俣地域における多様な人々との新たなつながりができると同時に、これまで育まれてきた関係も更に深まりつつあると考えています。様々な立場で、また様々な想いで水俣病/水俣病事件と長年向き合ってきた人々と、水俣の「今」について共に考えることから、「水銀汚染による健康被害、生活被害の全容解明」と「地域再生モデル提案のためのプラットフォームづくり」という2つのプロジェクトが開始されようとしています。

「地域と福祉を考える」をテーマとして昨年11月にスタートした第1回の公開講座には、予想を上回る数多くの参加がありました。「精神保健」、「障害者の地域における暮らし」、「老いを生きる意味」など、一回限りの講演/情報提供で終わるのではなく、それぞれの課題についての議論を深めるための場を設けて欲しいという声が寄せられています。また、「いのちと環境を考える」をテーマとして今年1月に開講した第2回公開講座にも、毎回多様な市民が参加し熱心に講師の話に耳を傾け、活発な質疑が行われており、「海の生き物たちの恵み」の受講者からは、親子を対象にし

た「海の生き物観察会」を水俣で開いて欲しいとの声も上がっています。今後、このような参加者の期待に応えるためにも、現地研究センターと受講者の皆さんとのコミュニケーションを保障する場として、「芦北・水俣地域再生プラットフォーム」の開設に向けた準備をしていきたいと考えています。

芦北地域振興局の保健福祉部・農政部と芦北教育事務所のリーダーシップのもと水俣市、津奈木町、芦北町の各地域で取り組まれている「食育パートナーシップ」事業も3年目を迎えています。各市町の保育園・幼稚園・小学校をフィールドに、地域の生産者、食生活改善推進員、老人会、学校栄養職員などとの協働で、それぞれ特色のあるモデル事業が展開されています。また、今年度は、「食育をとおした地域ネットワークの構築」事業が地元のNPO（NPO法人・水俣教育旅行プランニング）に委託され、水俣市の袋地区では“命を感じる体験プログラム”、久木野地区では“匂を味わう体験プログラム”が、「グリーンスポーツみなまた」と「ふれあいセンター愛林館」を拠点施設として開発・実施されました。現地研究センターとしては、行政・NPO・地域生活者の協働の取り組みを推進するための「潤滑油」としての役割をある程度果たせているのではないかと考えています。

今後更に、木臼野地区に計画されている産業廃棄物処分場の問題への関わりや、9月に予定されている「環境被害に関する国際フォーラム in 水俣（水俣学研究センター主催）」などの開催をとおして、芦北・水俣に暮らす人々との交流・相互理解・議論を行い、芦北・水俣地域の「今」と「これからの50年」について共に考えていきたいと思っています。



2006年1月 新日本窒素労働組合事務所解体



2006年2月
写真集「創ったそして闘いぬいた」
新日本窒素労働組合59年のあゆみ〜
販売六五〇〇円

水俣学現地研究センターで取扱います

今後の活動予定

5月1日 水俣学ブックレット出版
(熊本日日新聞社)

- ①谷川健一講演録「水俣再生への道」(仮)
- ②原田正純「ナイトエッセー水俣は今」(仮)
- ③「水俣ガイド～水俣病に学ぶ～」(仮)

5月 福祉環境学入門水俣現地研修

7月 大学院福祉環境学フィールドワークⅢ(海外)

8月 大学院福祉環境学フィールドワークⅠ
不知火海沿岸臨地研修

9月8日(金)～12日(火)

「環境被害に関する国際フォーラム

～水俣病50年の教訓は活かされたか～」

場所：熊本学園大学および水俣市内

水俣学研究センター日録

10月

- 4日 花田ゼミ水俣研修
- 11日 水俣学現地研究センター 健康・福祉相談開始
- 13日 堀ゼミ水俣研修
- 22日 水俣学研究センター研究員会議
- 25日 JICA研修「南西アジア地域公害防止行政コース」原田正純
- 29～30日 宮北ゼミ水俣研修

11月

- 5日 八幡西区役所まちづくり推進課・熊本学園大学連携事業、水俣学公開講座『水俣からのメッセージ』全5回
- 11日 第1回公開講座開始「地域と福祉を考える」
- 12日 シンポ「今、水俣を語る」熊本県保健医協会
原田正純、宮北隆志
- 12～13日 富樫ゼミ水俣研修
- 19日 水俣学研究センター研究員会議
- 20日 長崎シーボルト大学小林先生他水俣現地調査
- 21日 甲南女子高修学旅行生水俣学研修
- 24日 花田ゼミ水俣研修

水俣学関係新刊

『環境と公害』

第35巻第2号 2005年10月刊

特集「水俣病問題は終わっていない
—あらためて解決へ前進を求め—」

水俣病は終わっていない (原田正純)
水俣病問題の残された責任 (宮本憲一)
水俣病—その技術的側面— (宇井 純)
水俣学研究センターの設立にあたって(花田昌宣)ほか
岩波書店刊 定価1,260円
水俣学研究センターで取扱います。(割引あり)

- 26～27日 守弘・赤星ゼミ水俣研修
第3回環境紛争処理中日国際ワークショップ
基調報告(上海市) 原田正純
- 26～30日 中国淮河環境汚染地区現地調査
富樫貞夫・原田正純
- 29日 第3回公開セミナー「社会的経済と地域の発展」
講師：T・ジャンテ氏

12月

- 9日 第27回子どものからだと心・全国研究会議
特別講演 原田正純
- 12日 熊本県議会県民クラブ水俣学・産廃問題研修
- 16日 KSEH・Minamata Forum 2005・主催：韓国環境衛生学会、国水研、熊本学園大学
宮北隆志：“The Okinawa Study”
- 17日 第4回公開セミナー
「環境衛生に関する日韓シンポジウム」
講師：堀田宣之氏 Kim Yoon-Shin 氏
第1回水俣学研究センター総会
水俣学研究センター研究員会議
高林ゼミ水俣研修、
熊本県公衆衛生こんわ会水俣学研修

1月

- 7日 第5回公開セミナー「水俣学入門講座」
講師：原田正純
- 7～8日 第1回水俣病事件研究交流集会
富樫貞夫・宮北隆志・荒木千史・永野いつ香
- 27日 第2回公開講座開始「いのちと環境を考える」
- 28日 水俣学研究センター研究員会議

編集後記

毎日があつという間に過ぎてく中でも、時の移り変わりを実感する。1月末新日本窒素労働組合事務所がついに解体され2月末には更地になってしまった。今年は、水俣病公式確認から50年とさまざまな取り組みがされ、マスメディアでも水俣病のことが多く取り上げられている。それらが過ぎ去った後、来年の今頃、水俣病はどのような存在になっているのだろうか。(M・T)